2023.5.5
No.234

編集・発行人　樋口みな子
E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間2,000円）

春らんまんの野の花を楽しみました

夫の病気で登山する機会がなくなりました。せめて春の花を楽しみたいと心待ちにしていました。いち早く花を咲かせるスプリング・エフェメラルと呼ばれる花たちがいます。寒さに強い花たちは、いち早く太陽の光を利用して花を咲かせ、受粉をし、タネを作り、養分を蓄えます。春の妖精とも呼ばれていますね。私が友人と行った浦臼神社（浦臼町）のカタクリやエゾエンゴサクは強風の中で、根を張って可憐に咲いていました。

2023.4,24 浦臼神社のカタクリ

4.24 エゾエンゴサクとカタクリの群落

私が初めてカタクリの群落に出会ったのは、旭川と比布町にまたがる突哨山でした。「大雪と石狩の自然を守る会」に入ったばかりの頃なので、はるか46年も前です。まだ男山自然公園が整備されていない頃で、笹やぶを越えてすぐにカタクリの大群落に「ワ～。どうしてこんなに咲いたの！」と感動した日を思い出します。蟻が種を運び、8年かかって咲くと知って、その息の長さといのちをつなぐ強さに大好きな花になりました。

浦臼神社の急な階段を降りると、廃線になった線路脇に、キクザキイチゲ（左写真）が迎えてくれました。たくさんの人を乗せた鉄道を忘れないでと語りかけているようでした。ニリンソウ（右写真）も隣で咲いていました。人知れず咲く花たちは尊いと思いました。

浦臼から帰る途中の小さな湿原に咲いていたのはミズバショウとエゾノリュウキンカ（左写真）。白と黄色のコントラストが可愛いですね。小さな花旅で心が洗われました。「草や木に対して敬虔に祈るということが好きですね」とおっしゃった石牟礼道子さんの気持ちが私にも分かるような気がしました。

（文と写真　樋口みな子）

手書き家族新聞「たまのきしべ」を私より早くに発行されていた奥野謙介さん。病気になられてからは発行できなくなりました。私は読んでいただきたくて寄贈し続けていました。お体が不自由な中で時間をかけて書いてくださったお手紙です。原文をそのままパソコンに打ちました。

高齢化社会を排する政治の力に抗する力を　　奥野謙介（府中市）

脳卒中で倒れてから10年間、骨折入院など苦しい時間を経験してきました。

あの福島第一原発の事故によって、故郷を追われた人が長年育ててきた夜の森の桜を楽しむまでに要した時。

反原発の声が日本中に広がるのに費やした時、「銀河通信」の35年を想うと、自分の実体験から、その時間と力の大きさを感慨をもって思わずにはいられません。

小野有五様のご挨拶を拝読しますと、届いた「銀河通信」の記事と写真から、初めて知ることが多く、私自身の生きていく力の糧になっていることで、樋口さんに感謝でいっぱいです。

このような会を発案、企画し、集まられる人が多くいる札幌の街に、私は憧れました。

233号に「きたがわてつコンサート」の記事がありました。私は調布市、府中市（注隣町です）に住んで50年。地元の調布FMの番組にきたがわさんが出演した時には、「そんな町を」をリクエストしたことを思い出しました。

「老人の生きていく力の源は、意欲」という説があります。高齢化社会を排する政治の力に抗する力をこれからも与えてください。

３月のある晴れた日、山が懐かしくてJRタワー３８階の展望室に上がって、札幌の山々を眺めました。山は少しも変わることなく札幌市民を見守っているようです。弱音を吐いても許してくれるかな。左から神威岳、百松南峰、鳥帽子岳、百松北峰、手前左は奥三角山です。
（撮影・樋口みな子）

私の心に純粋に沸き起こった自分の気持ちを言葉にして伝えよう

クッキングハウス会の松浦幸子さんから233号の感想が寄せられました。1面に夫の病気のことを公表したことは、「自分の辛さや苦しさを語っていて心に響いた」とありました。

クッキングハウスの家族SSTはひとりぼっちで悩まず、一緒に考えあう学びの場です。ソーシャルスキル・トレーニング（SST）とは、社会で人と人とがが関わりながら生きていくために欠かせないスキルを身につける訓練のことです。

私自身もまったく迷わなかったわけではありません。でも「私は今、困っています。苦しいです」と伝えなければ、今の生活そのものもますます苦しくなると思いました。自宅介護は医療スタッフとのコミュニケ―ションなしにはとてもいい医療を受けることはできません。

夫の体調が良くなると、転倒はしなくなりました。肺炎を防ぐリハビリにも助けられました。「何も困っていません」と言っていたら、私の苦しみは解消されなかったと思います。

松浦さんはこうも書いています。

「近年『平和学』の中の『紛争解決学』としても私メッセージが大切なコミュニケーションとして位置づけられるようになりました。私メッセージで話すことは対話が成立するということです」。相手の気持ちを理解し自分の気持ちを伝えていくことで対話のコミュニケ―ションが成立すれば、そこには様々な無理解、偏見、差別、思い込み、誤解など、人間関係を苦しくさせていたものが解決される希望が見えてきます。

世界の戦争や紛争も私メッセ―ジの対話で、相手への理解が深まり、解決されることを願ってますと結んでいます。

233号　三上智恵さんの「バケツリレーと安保３文書ー意味のない訓練をやる意味」を読んで　　小黒和子

三上智恵さんの文章と、樋口さんの「あとがき」を読ませていただいたところです。

ウクライナの事情によせて日本でも軍備を拡張する動き、本当に不安になります。ウクライナの人たちをなんとかして助けて あげたいという気持ちは日毎に感じていますが、日本が軍備拡張するのは、全く違うことだと思います。この世界、日毎に壊れてゆくような感じを持つことがありますが、どうしたらいいのでしょうね。

沖縄の人たちの危機感を煽って、形だけの避難訓練をする、そしてそれだけを放映する、などというやり方は、戦争の本当の恐ろしさから目をそらせるだけになりそうです。バケツリレーの話が出ていますが、私は親たちがバケツリレーに駆り出されていたのを記憶している年代です。馬鹿馬鹿しいと思いながらも、近所の人たちの決まりにそむくわけにもゆかなかったようです。でも、実際に東京空襲のときには、バケツリレーどころの騒ぎではありません。庭に穴を掘った防空壕も、入っていたらその中で焼け死ぬか、生き埋めになるかしていたかも、といった代物でした。

いまは軍備と言っても7、80年前とはさらに一段と違った破壊力です。それも機械的な操作だけでたくさんの人たちを犠牲にすることができるもの。これで軍備を拡張し始めたら、地球そのものが壊れてしまう、といつも思っています。原子力にいたっては、原爆や原発事故から、人間の手におえないその怖さを感じないのだろうか、といらいらしますが、なにもできずにいます。

大江健三郎の死を悼む － 戦後民主主義を純粋に引き継いで実践した書生で指導者

note「世に倦む日日」2023年3月15日 11:54

2013年11月、秘密保護法案の反対デモに立ち寄るべく銀杏並木の国会裏に出かけたら、途中、官邸前交差点の歩道上に大江健三郎の姿があった。昼間、何人かの市民と一緒にそこに佇み、本を読みながら時間を潰すような感じで立っていた。その場所の人数は疎らでデモの群衆がぎっしり幟を立てて集会していたのは衆院第二議員会館前だったから、そこは数人だけが静かに抗議の時間を送る一角だった。あれ、大江健三郎が来ている。テレビで見る顔と同じだ。歩く足を止め、数メートルの間隔で凝視していたら、その視線に気づいて大江健三郎は反応を返した。こちらに顔を上げ、少し照れた表情を浮かべくるっと後ろを向いて背中を見せた。私は横断歩道を渡ってデモの方に進んだが、何かとても幸運な出来事に遭遇した気分になり、日記帳代わりのツイッターに報告メモを上げた。／大江健三郎が死んだ。88歳だった。そんな高齢だったのかと戸惑う感覚を覚える。もう少し元気で長生きして欲しかった。まだ数年は言論活動してもらえると期待していた。そういう残念な気持ちを正直禁じ得ない。ここ数年マスコミに出る場面がなく、体調が不全なのかなと気になっていたけれど、もう88歳になっていたのだ。大江健三郎は、9条の会の発起人の中でいちばん若かった。政治に対して敏感で精力的で、9人の知識人の中で最前衛に立ち、会の代表格として活発に発言していたから、実年齢よりも若く感じてしまい、80代前半くらいに思っていた。昨年、安保3文書の閣議決定があり、防衛費倍増とトマホーク配備の決定があり、慌ただしく、何の抵抗もなく軍拡政策が進められて行く中、大江健三郎の言葉が欲しかった。何も警世や抗議の声が出ないのは、それだけ健康状態が悪いのだろうと想像するしかなかった。／9条の会の9人の知識人。大江健三郎、加藤周一、鶴見俊輔、小田実、井上ひさし、奥平康弘、梅原猛、澤地久枝、三木睦子。生き残っていたのは大江健三郎と澤地久枝だけ。澤地久枝は93歳で、大江健三郎の方が5歳も若い。大江健三郎に代わる者がいないから、この死は私にとって痛恨で断腸の思いである。「早すぎる残念な死」だ。今、台湾有事の戦争を止めるべく動きを起こさないといけない。大江健三郎にはその先頭で言葉を発してもらいたかった。最後の力をふりしぼり、9条平和主義のメッセージを絶唱してもらいたかった。菅原文太のように、われわれの心の中に永遠に刻まれる、遺言となる渾身の言葉を残して欲しかった。大江健三郎にはその使命があったし、本人もまた、最後まで9条を守る現役戦士たるを自覚していたはずだ。自らに代わる者がいない事実を承知し、シンボル的リーダーの責任を理解していたと思う。／9人の中で最も若い大江健三郎は、9人の中で戦後民主主義に最もピュアに即いた人だった。迷いや揺れが全くなく、個性的な思想の屈折や遍歴の回路がなく、真っすぐに丸山真男の戦後民主主義にコミットした人だった。それを堂々と語って説いていた。あるときのテレビ番組で、司馬遼太郎の「明治国家」を引き合いに出し、「司馬遼太郎さんの『明治国家』と同じ意義の重さで、丸山真男さんの『戦後国家』がある」と言い、戦後日本を積極的に称揚していた姿が印象に残っている。戦後民主主義の直系の申し子であり、自らそれを自認し自負していた。丸山真男の戦後民主主義とは、民主主義の永久革命が神髄であり、支配される者（demos）が支配する（kratos）逆説のダイナミックスを不断に実現する、過程と運動のことである。大江健三郎はその政治理念を信念として持っていた。信奉し実践していた。丸山真男の弟子だった。筑紫哲也と同年齢。この世代は本当にこの精神の芯が固い。だから常にデモに出たのである。「市民はデモするしかない」と脱原発運動の場面で説いていた。

2013年11月に官邸前で見た光景は、大江健三郎のアジテーションがうわべの言葉でなく自ら実践していた事実を証明するもので流石だなと感心させられたし、その姿に大いに勇気づけられた。大江健三郎には知識人の基準と規範があり、それに依拠することに躊躇がなかった。戦後日本の偉大な先輩たちの行動に続くことに自信と誇りを持っていた。例えば、文化勲章の辞退もそうである。巷の右翼はこの一件に執拗に難癖をつけて絡んでくるけれど、本人の理由説明の口上はどうあれ、この行動は丸山真男のそれを見倣ったものだ。戦後民主主義の知性の系譜に繋がる者として、標準のコードとプロトコルに逸脱することなく準拠したのだ。文化勲章辞退こそ大江健三郎にとって最高の名誉であり、男子の本懐だっただろう。

大江健三郎はブレなかった。言葉と行動が真っすぐで信頼感があった。そこが魅力であり本当に頼れる存在だった。福島第一原発事故の後の2011年9月に始まった「さようなら原発1000万人アクション」でも、呼びかけ人となった大江健三郎は常に横断幕を持って先頭を歩き注目の集会で演説する姿があった。その活躍がNHKの7時のニュースで積極的に紹介された。脱原発デモの看板だった。今から考えると、2012年6月からの反原連（しばき隊）の官邸前デモに人が集まったのも、それに先行して「さようなら原発」の活動と存在があり、指導者の大江健三郎が市民にデモ参加を呼びかけた説得が奏功し浸透していた点が大きい。大江健三郎は熱心に純粋に市民にデモを訴えた。小田実が健在であればやることを76歳の大江健三郎がやっていた。9条の会の設立が2004年で69歳のとき。そこから7年経った2011年、76歳の大江健三郎は見た目も変わらず若々しく活力に満ちていた。／9条の会を立ち上げたときの会見で、大江健三郎は教育基本法について次のように語っている。抜粋してかみしめたい。改悪される前の教育基本法のことである。／《私は教育基本法をだいたいそらで言えますが本当にいい文章なんです。内容があります。悲惨な戦争をしてアジアに悲惨を撒き散らして、世界的にも断絶して、日本国内にも大きな損害をもたらした。こういう段階で、大人が子どもたちに「私たちはこういう教育をしようとしているんです」と子どもに本気で訴えかけている言葉です、教育基本法の文体は。法律の中でこういういい言葉を使っている法律を私はあまり知りません。これは憲法の前文と9条にもつながっています。憲法全体

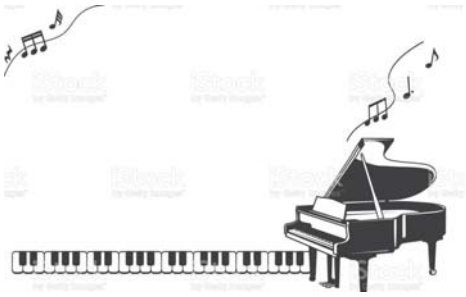
の非常に優れたエッセンスを取り出して、しかも分かりやすい言葉でみんなに伝えようとしている。/伝えようとする自分たちは、戦争に責任のあった人間として、日本を再建する人間として、それに携わる人間として、父親として教師として、「われわれは、こうしようとしてるんだ」と呼びかけているんです。世界に向かって開いていく教育というものが基本的な構想です。たとえば、われわれが平和と真理を目指す教育をするとか、個性というものを表現しながらしかも普遍的であるものを文化として作りたいと言っているのは、日本人が世界に向かって開こうとしているわけです。その勢い、その方向づけが教育基本法の一番いいところで、そして憲法につながるところだと思います。 》 この言葉もとてもいい。［以下略］

「民主主義を取り戻そう！憲法の精神を取り戻そう！」坂本龍一さんのメッセージ

3月28日、坂本龍一さんが亡くなった。「脱原発・平和」を訴えつづけてきた坂本さん

以下、発言を紹介する。(「レイバーネット日本」編集部)

こんにちは。よろしくお願いします。／シールズと安保法案反対の運動が盛り上がってくる前に、僕はかなり現状に対して絶望してたんですが、シールズの若者たち、そして主に女性たちが各地で発言しているのをみてですね、日本にもまだ希望があるんだなと思っているところです。本当によかったです。／ここまで政治状況が崖っぷちになって初めて、私たち日本人の中に憲法の精神、9条の精神がここまで根付いていることを、皆さんが示してくれてとても勇気づけられています。ありがとうございます。／今の日本国憲法は確かにアメリカにいただいたという声もありますけれど、いまこの状況で民主主義が壊されようとしている、憲法が壊されようとしている。ここにきて民主主義を取り戻す、憲法の精神を取り戻す。僕は、いまの憲法を自分たちの血肉化するとても大事な時期だと思います。／憲法というのは、世界の歴史を見ても、何世紀も前から、人々が自分たちの命を賭けて闘いとってきたものです。もしかしたら日本の歴史のなかでは、明治憲法しかり、日本国憲法しかり、日本人が命を賭けて闘いとってきたものではなかったかもしれないけど、いままさにそれをやろうとしているんだ。僕たちにとっては、イギリス人にとってのマグナカルタであり、フランス人にとってのフランス革命に近いものが、いまここで起こっているのではないかと強く思っております。／ぜひこれを一過性のものにしないで、あるいは仮に安保法案が通っても終わりにしないで、ぜひ守り通して、行動を続けていってほしいと思います。僕もみなさんと一緒に行動してまいります。どうも、ありがとうございます。(まとめ・M・M)



本 Books

等身大の日々をつづった車椅子の留学記

宇宙のニュージーランド日記
なつかしい未来の国から

安積宇宙(あさかうみ) 著
ミツイパブリッシング 1,980円

安積宇宙(あさかうみ)さんが背伸びせず等身大で語る、たくさんの人たちとの出会いや、ニュージーランドの豊かな自然が生き生きと伝わってきます。

ニュージーランド南島の南、ダニーデンのオタゴ大学に留学して、寮生活を始めます。ソーシャルワーカーになるという目的がありました。見て、学んで、感じたことをwebで連載。まとめたのが本書です。

文章はこんな風にはじまります。「ニュージーランドでは、空港に着いた時から、いろんな人種の人がいて、いろんな体型の人がいる。人々があまり着飾ることなく、等身大で生きている感じがする。それが、私がニュージーランドを好きな理由の一つだ。それから、見渡すかぎりいっぱいに広がる緑と青い空も」と記します。私も25年前に家族でニュージーランドを旅して、自然の豊かさ、人々の温かさに感動した日を思い出しました。

障害があっても、人みしりせず友人を巻き込んで、旅もするし、環境問題や先住民族のマオリの人々に深い関心を持ちます。

宇宙さんは「サモアやフィジー出身の友だちは、長い間積み上げられてきた生活の中の知恵をふり返ることが大切なのだと、思い出させてくれるし、デモに参加する友だちと話をすると、力をもらう。インターネットから、この問題を真剣に考えている人たちが世界中にいることもわかる。こうした問題と向き合う時、一人にならないことが大切だと私は思っている。一人でできることは本当に少ないけれど、つながってくことで、できることは広がってく」と言います。この前向きな姿勢にも学びたい。

ニュージーランドに来てアジア人としての自分を意識するようになり、アジアのいろんな国にルーツを持つ友だちに出会って、アジア人同士のつながりを大切に思うようになり、これまで避けていた障がい者としてのアイデンティティも受け入れられるようになったと述べています。

大学在学中の2018年に若者発展省から「共生と多様性賞」を受賞しました。

この本を書き終える2ヶ月前に、ニュージーランドの永住権を取得しました。「体がここの土地にすっとなじんでいくような感覚があった」と書くのです。宇宙さんのたゆまぬ努力に感銘を受けました。

現在は障害分野を専門とするドナルド・ビーズリー研究所で研究員として働いています。ピアカウンセラーの安積遊歩さんは宇宙さんの母です。

(樋口みな子)

クマの兵士が学んだことは？

絵本　だれのせい？

ダビデ・カリ作、レジーナ・ルック‐トゥーンペレ絵、ヤマザキ マリ訳green seed books刊　1,980 円

何でも切り捨てる立派な剣を持つ、強いクマの兵士がいました。

その剣で森の木をなぎ倒して砦を築きますが、川が氾濫して砦はこわれてしまいます。「オレさまの砦を こわしたやつを まっぷたつに きってやる」。

怒ったクマの兵士は、川を氾濫させた"犯人"を懲らしめてやると自慢の剣をもって出かけます。

ダムの番人を脅かした"犯人"を追及すると、別の動物が"真犯人"といわれます。

"洪水の真犯人"を探す中で出会った動物たちの話を聴くうちに、クマの兵士は考え込んでしまいます。「だれのせい？」"犯人探し"のなかで、クマの兵士が学んだことは？・・。

イタリアの作家ダビデ・カリの原作に、バルト海の国エストニアの画家レジーナ・ルック-トゥーンペレが素敵なイラストをつけました。その名作を日本語にしたのは漫画家ヤマザキマリ。初のイタリア語の翻訳本です。

「私たちの世の中もこんなだったらいいのに」という思いを込めて。

現実世界でウクライナ侵攻が続くなか、大人でも答えの見つからない戦争を子供たちにどう語りかけたらよいのか、悩むばかりです。

そんなときに、この絵本を手にして、子供と一緒にページを開いてみてください。

誰もが目を奪われる素敵なイラストと明快なコトバで、世界にとって一番大事なメッセージを伝えてくれます。

（Pinot）

三世代の女性たちが記憶を語る

海を渡り、そしてまた海を渡った

河内美穂著　現代書館　1,980 円

旧満州の興安嶺（こうあんれい）で中国人に拾われて育った日本人の王春連（ワンチュンリエン）、その娘の蒼紅梅（ツァンホンメイ）、孫娘の楊柳（ヤンリュウ）と三世代の物語。

最近、中国の独裁政治が話題になりますが、激動の時代を生き抜いた姿に圧倒されました。開拓団として日本から旧満州に渡り中国人を雇用していた日本人は敗戦後、主従が逆転しました。

ワンチュンリエンは地元の少年たちに日本鬼子（リーベングイズ）と罵られ唾をかけられます。その娘のツァンホンメイも同級生からいじめられ、学校にも行けず、きれいな下着さえもなく厳しい労働を強いられます。ある時、無医村に若い医師が派遣され、ホンメイはその医師から文字を教わります。ホンメイは生き生きと変わって行き、医師の補助的な仕事を提案されます。でも役場からの返事はありませんでした。ホンメイの夢は消えてしまいます。

興安嶺の未開の自然の風景描写と響きあってその姿は美しい。私が一番ホッとした場面でした。

ホンメイはその後、夫や母、子どもたちと日本に帰国。ヤンリュウは大学を出て日本人と結婚しますが、壮絶ないじめにあった兄がいます。

3世代の女性が過酷な過去と向き合います。「彼らの語られなかった思いや言葉を伝えたかったから」と著者の河内さんは語っています。

物語の最後、孫娘のヤンリュウは老いて記憶が混濁し始めた81歳のワンチュンリエンを施設に訪ねて色々な思いが沸き上がります。

「あの世もこの世も、中国も日本も、過去も今もいっしょくたになって、会いたい人に会えるといい」とつぶやきます。生まれて来る時代も境遇も選べないけれど、自分に誇りを持って生きられるものとは何だろうかと問われたように思います。

中国残留孤児が時代に翻弄されながら懸命に生き抜いた人生が瑞々しく描かれ感動しました。

（樋口みな子）

ジェンダー平等を体現

ポリーヌに魅せられて

ジョルジュ・サンド　ツルゲーネフ　ショパン　サン＝サーンス　リストたちが讃えた才能

小林緑著　梨の木舎　2,420円

19世紀に、活躍したポリーヌ・ガルシア＝ヴィアルド（1821～1910）を知っていますか？

私は音楽に疎く、有名な作曲家しか知りません。著者の小林緑さんはジェンダー平等の視点から音楽史の書き換えを問います。

ポリーヌはフランスの音楽一家に生まれ、16歳でオペラ歌手としてデビュー。オペラ女優としてヨーロッパを周遊。作曲家、ピアニスト、肖像画家としても才能を発揮しました。でも、日本ではほとんど知られていません。

当時は男性主体で、女性が主役として舞台に立つことが許されず、高い音域の声も男性が担っていたという。それを打ち破って主役で登場し、喝さいを浴びたという。音楽でジェンダー平等を体現したことをたくさんの資料にあたって検証しました。

親友ジョルジュ・サンドや、文豪ツルゲーネフ、作曲家ショパン、サン＝サーンスやリストなどが讃えたという履歴にも驚きます。夫ルイ・ヴィアルドがポリーヌに寄せる信頼も大きかったと思います。

晩年は次世代を育てる師として、貢献した人生に目が開かれました。（樋口みな子）

絵・堀　泰雄さん
（前橋市）

軍拡と原発回帰をどうしても、止めなければ

核兵器廃絶を求める原発被災地集会に参加して　文・写真　伊藤功

東日本大震災から12年目に、私は初めて、福島県に旅しました。

その日3月11日午後1時30分、核兵器廃絶を求める原発被災地集会が、楢葉町の、宝鏡寺で開催されたのです。その場に、第30世住職…早川篤雄氏の姿はありませんでした。列島の太平洋側で、30年以内にM9クラスの大地震が予測される下で、核兵器禁止条約を批准しようとしない政府が、軍拡と原発回帰の動きを見せています。生涯の大半を、反原発の運動にささげられた早川氏は、昨年末病魔に襲われたとき、どんな思いだったでしょう。

宝鏡寺の境内には、氏の志を受け継ぎたいと、全国から百数十人が結集。オンラインには三百数十人が参加しました。長く、京都から通って早川氏と共同してきた、安斎育郎立命館大学名誉教授が、長い裁判闘争や、伝言館建設の経過をお話され、「大きな転換期を迎えている、残された人達で、早川さんの遺志を継いでいきたい」と訴えられました。

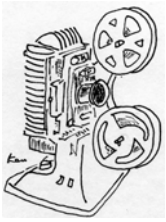
集会は、21年3月11日東京上野の東照宮から、移設された「非核の火」と、同時に建立された、「原発悔恨・伝言の碑」の前で行なわれた、碑前祭でもありました。諸宗教の祈り、僧侶鈴木きよのさん（写真上）のコンサートは、好天下、美しい木々の花ばなに包みこまれて、参加者一同に、深い感銘を与えてくれるものでした。私が参加したのは、たかさき法律事務所9条の会と、平和と教育を考えるツアー連絡会の、共同企画です。

写真：全国から100人を超える人たちが集まりました。

中間貯蔵施設、廃炉資料館、jビレッジ、遺構「請戸小学校」、大堀相馬焼の郷などを巡りました。バスが走る国道の両側は、汚染されたままの林。東京五輪の聖火ランナーが走った道の両側に有った、フレコンバッグが運び出された跡は、不自然な黄色い山土を入れた風景が、どこまでも広がります。人が住めず、農業も復活できない土地には、国道脇から、遥か山裾まで、太陽光パネルで埋め尽くされていました。最終日、日本国憲法の間接的起草者、鈴木安蔵さんの生家で、讃える会の方と懇談しました。元漁師の逞しい男性は、「福島の不幸は、震災から始まったのではない、住民自身が(明るい未来のエネルギー)として信じて、原子力を誘致した時から始まったんだ！」と話されました。

写真：展望台から第一原発を望む。目の前にも汚染土が仮置き場として利用されている。

爆発寸前だった第2原発、東京が危ないと、天皇が避難しようとした時、偶然が重なって、現状に留まったにすぎない…今、軍拡と原発回帰をどうしても、止めなければ…との思いを皆で共有しつつ、暑かった福島から、寒い北海道への帰路につきました。



リベロがくれた幸せのブックリスト

丘の上の本屋さん

クラウディオ・ロッシ・マッシミ監督・脚本

小さな本屋のおじいさんと、アフリカ移民の少年の話です。イタリアで最も美しい村、チヴィテッラ・デル・トロントが舞台です。息をのむ絶景や石造りの歴史ある街並みが味わえるのも魅力です。

古書店の老店主リベロとアフリカ移民の少年エシエン、隣のカフェのニコラ、個性的なさまざまな客との会話が楽しい。リベロを演じたのは、イタリアの名優レモ・ジローネ。リベロがエシエンに貸す本の数々は人生を豊かにするものばかりでした。コミックから児童文学、中編小説や長編小説など。「ピノッキオの冒険」「星の王子さま」「白鯨」「ロビンソン・クルーソー」など。リベロは必ずエシエンから感想を聞くのです。エシエンは読書によって、まだ見ぬ広い世界を知り成長していきます。

「リベロ」にはイタリア語で「自由」という意味があります。店主リベロは、エシエンに自由であること、誰もが幸せになる権利を持つことを、読書で伝えていくのです。　リベロはエシエンに「本は2度味わうんだよ。一度めは理解するため。2度目は考えるため」と伝えます。

私は小・中学と転校が多く、本が友だちでした。本好きな父は札幌に出張のたびに本を買ってきてくれました。図書館でもたくさん本を読みました。昔はテレビはなく、私は田舎育ちで映画にもいけなかったので、本が唯一の楽しみでした。中学2年で転校した時、父から買ってもらった「アンネの日記」に感動して、クラスのみんなに「ナチスの迫害に負けないで隠れ家で、生き生きと自分の気持ちを書いた日記を読んで」と回し読みしてもらった日を思い出しました。いつかイタリアに行ってみたいな。　（樋口みな子）

ビル・ナイが歌う「ナナカマドの木」が心に沁みる

生きるLIVING

オリヴァー・ハーマナス監督　カズオ・イシグロ脚本

1952年の黒澤明監督による名作『生きる』のリメイク作。ノーベル賞作家カズオ・イシグロが脚本を書き下ろし話題になりました。

物語の舞台は日本から第二次世界大戦後のロンドンへ。

ウィリアムズ（ビル・ナイ）は市役所の元同僚のマーガレット（エイミー・ルー・ウッド）に街で再会し、健康的で屈託のない明るさ、洞察力やバイタリティに惹きつけられます。ウィリアムズのあだなはゾンビだと。その意味を聞くと「死んでいるのに生きている」からと答えます。もうじき死ぬことが分かっているウイリアムズは、息子には言えなかった、自分が癌で余命がわずかであることを告白すると、マーガレットが涙を流すシーンに胸を打たれました。彼女の活力に影響を受けて、人生を意義あるものに変えていくビル・ナイの静謐な演技は味があり秀逸。

市民の要望で、子どもたちのための公園を作ることを決意し、力を振り絞って奔走するウイリアムズが完成した公園で、楽しそうにブランコに乗って歌ったのは「ナナカマドの木」でした。ビル・ナイの哀愁のある声がとても良かったです。「ナナカマドの木よ、いつも懐かしく思い出す、幼き日の思い出に優しく寄り添う木・・・」。この歌を聴けたことに感銘を受けました。他者を思いやることの大切さは、どこに住んでいても変わらないですね。

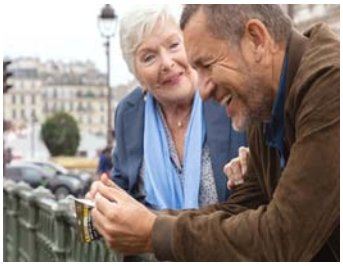
脚本を書いたカズオ・イシグロさんは、「妻はスコットランド出身で、この歌が好きで、いつも歌っている。この歌で、主人公の亡くなった妻への思いを示したかった。主人公は妻の死で、自分の一部も失っていた。最後にそれを取り戻し、人生を100％生き抜くことができた。そういう思いも込めた」と語っています。

数年前まで我が家の庭にあったナナカマドの木を思い出しました。成長し過ぎて、隣の窓にまで届きそうになり、苦情が出る前に伐らざるを得ませんでした。20年近く見てきた、懐かしい木をテーマにしたスコットランド民謡があると知ったのも初めてで心に残りました。ラストでウイリアムズの理解者だったピーターとマーガレットがカップルになった場面で終わり、若い世代が未来を牽引し平和で豊かな世界にすることを示したように見ることができました。（樋口みな子）

マダムの依頼は人生を過ごしたパリを横断する“寄り道”

パリタクシー

クリスチャン・カリオン監督・脚本



タクシー運転手と92歳のマダムのパリ横断旅を描いたヒューマンドラマ。

シャルルをフランスを代表する俳優ダニー・ブーン、客として乗車した女性マドレーヌをシャンソン歌手として活躍するリーヌ・ルノーが演じました。リーヌは「私が生きた時代そのもので、自分の人生を思い起こさせるものだった」と語っています。

免停寸前で経済的にも崖っぷちのタクシー運転手シャルル。明るくて品のある92歳のおばあちゃんマドレーヌ。彼女は「寄り道してくれない？」と語りかけ人生を過ごしたパリの街を走る。介護施設に入居するマドレーヌの思い出の場所に次々と寄り道してそこで語られる彼女の人生と、美しいフランスの景色が交差します。

彼女が語るのは波乱の人生。最初は甘くロマンチックでしたが、次第に彼女の人生のつらい一面が明らかになっていきます。シャルルも自身の人生を語ります。戦前に生まれた女性が、どのような状況にあったのか、そしてどう立ち向かってきたかも伝わってきました。

明るくユーモアいっぱいのマドレーヌと話すうちに、シャルルの頑なな心がほどけていきます。そして彼女を老人ホームに送り届ける頃には、シャルルは別れるのが寂しくなっているのでした。ふたりの波長があったとしか思えません。

人生の終盤を迎えて、次の世代のために美しい世界を遺そうとし、そんなときに出会ったのがシャルルでした。

人生には偶然とは思えない出会いがあるのだと思いました。後半は二人が笑顔になって、ユーモアもたっぷり。人生を変える様な一日って意外と気づかないくらいの時に訪れるんですね。

私にもいくつもの大事な出会いがありました。美しいフランスを旅した気分にもなれ、マドレーヌの人生を共に振り返り、ラストは涙が溢れました。

好きな時に映画を観るということが難しくなって、たまたま出会ったのが「パリタクシー」でした。人生崖っぷちのシャルルを救うことになるとは思いもしませんでした。息子を亡くしたマドレーヌからのバトンは、シャルルとその家族に、そして私の胸に届きました。（樋口みな子）

3,16 自宅近くからの夕日（撮影・樋口みな子）

貧しくても支え合う希望の青春物語

せかいのおきく

阪本順治監督

矢亮（池松壮亮）と中次（寛一郎）は江戸の街で糞尿を買い、農村に運んで肥料として売っています。おきく（黒木華）は武家育ちだが勘定方だった父の源兵衛（佐藤浩市）が上役の不正を訴えて追放されて貧乏長屋暮らし。寺子屋で子どもたちに読み書きを教えています。この3人が寺の厠（かわや）の軒下で雨宿りをしたことで出会います

全9章からなる短編が1本になったモノクロ映画ですが、章の区切りがカラーで現れます。江戸末期を舞台に、庶民目線に立ち、庶民生活の悲喜こもごもを描き出しています。

中次は以前は紙屑拾いでした。侍や上流階級は威張り、糞尿を扱う中次や矢亮のことを馬鹿にする。時には暴力まで振るわれる。矢亮は笑いに変えて踏ん張っています。貧乏長屋の住民は文句は言うが彼らがいなければ生活が成り立たないことを知っています。

ある日、おきくの父は数人の武士に斬られて死んでしまう。おきくもそれに巻き込まれて喉を切られて声を失います。おきくは家に閉じ籠って寝込んでしまいます。その時の長屋の住人たちの行動が心に染みました。無理に彼女を起こすようなことはせず、ひと声かけて家の前に焼いた魚を置いて行くのです。寺子屋の住職や、おきくに学んでいた子どもたちが、長屋に来て、「できること、書くことを教えて」と懇願します。ようやく起きだす決意をするのです。

思いを寄せる中次に丹精こめて握ったおにぎりを届けるシーンが美しい。空を見上げてて、馬車に轢かれおにぎりがつぶれてしまう。中次に体中で表現するおきくに胸を打たれる。やがて雪が降り出す。その気持ちが中次に伝わるのです。読み書きが出来るとか、武士の娘であるとかに奢ることのない、おきくの純粋さに心が洗われました。

文字の読めない中次は、おきくに字を教えて欲しいという。それが叶ったシーン。寺子屋でおきくが子どもたちを教えている。その中に中次もいる。おきくは子どもたちにお題を出す。それがこの映画のタイトル「せかい」。その言葉がじんわりと胸に響きます。「せかい」を教えたのはおきくの亡き父でした。「空は果てしなく、彼方には知らない事がたくさんある」と、諭します。そして、もし好きな女ができたら「せかいで一番好きだ」と言えばいいと教えます。なんて素敵な父なんだろう。

ユーモアを織り交ぜつつ、江戸の庶民生活や若者たちのほのかな恋模様を美しいモノクロ映像で表現。心に染みいるような作品でした。（樋口みな子）

あとがき

★これを書いているのは憲法記念日の5月3日。5年間で43兆円もの大軍拡にどうして、メディアはもっと問題にしないのだろう。憲法9条に違反しているのにと思う。「9条は現実に合わない」と言う人がいます。ロシアにウクライナ侵略でそう考える人が増えたようですが、危険が強まったからこそ憲法9条が必要だと思います。米中戦争が現実味を帯びて語られます。日本に双方の銃撃がおきるのではないかと心配です。★ドイツで脱原発が終了しました。日本は未曾有の福島原発事故を経験したのに60年以上運転しようとしています。日本は地震が多く、老朽化でインフラが弱体化するともっと危険です。核燃料廃棄物の最終処分場もないのに、原発を使ってほしくありません。★家族の介護がちょうど1年になります。用事があっても外出するのが難しく、介護サービスがなければとっくに私自身がつぶれていたと思います。調査によるとこの物価高と人員不足などでここ数年で3割近くが運営できなくなるという報告がありました。介護事業がなくなったら、利用者の家族は精神的にも肉体的にも疲弊してしまいます。国の政策で福祉に力を入れて欲しいです。（み）

４月２９日　満開のソメイヨシノ
札幌中島公園で
（撮影：樋口みな子）

５月２０日に「銀河通信」３５周年を祝う会を開いていただきます。５０人が参加されます。お目にかかれるのを楽しみにしています。また１２０人を超える読者からお祝いのメッセージありがとうございます。

購読料と寄付をありがとうございます　（敬称略）2.25～5.2

新井喜美子　作田信子　黒田忠　宮本紀子
岸裕子　水野隆夫　清水俊子　川崎剛　笹島秀則
高橋儁　泉恵子　尾嵜弘子　上條敏昭　小黒和子
菅原三栄子　吉田雅子　　伊藤牧子　匿名
久野真紀子　吉根由起子　亀田法子　鈴木えり子
鈴木訓　田村陽子　芳賀孝郎・淳子　戸谷真智子
今美千代　宮森多恵子　仲俣善雄　匿名
沼崎勝洋　阿保亘　齊木登茂子　張玉龍　伊藤功
小池修生　神原照子　益子美登里　藤田春美
木村久子　長澤恵子

購読料とカンパ、切手155,000円は印刷と送料に使わせていただきます。
郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 年間2.000円です。web読者のカンパも歓迎します。
各地の話題など読者のみなさまの投稿をお待ちしています。1500字以内で写真もお願いします。